

人とつむぎ、織りなす日々のなかで 高齢期の発達

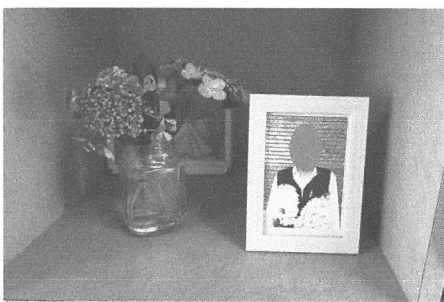
第6回 一人じゃない、みんな同じ 死と向き合うとき

先月号で、50歳を過ぎてから刺しゅう作家として花開いたトミさんの例は、体力や視力の低下のような健康上の衰えがあっても好きなしごとが支えになることを教えてくれます。そして、興味を示し続けていることを余暇時間の単なる遊びとせず、しごとや暮らしを充実させていけるヒントとしてとらえなおす姿勢をもち、考え続ける支援者でありたいと願っています。

これまで、トミさんを含めて高齢期の4人を紹介してきました。高齢期といっても、一人ひとりその迎え方にはちがひがあります。体力的なちがひやケガの経験、疾患の有無などのちがひもありますし、好きなしごとに出会った時期もちがひがあります。共通するのは、続けたい好きなしごとがあること、友だちと支えあいながら、さまざまな変化とどう付き合うか悩んでいることです。

その変化の一つに、身近な人との死別体験があります。高ちや職員との会話で少しずつ言葉にできるようになっていきます。その姿から、織物工房とあざみ棟の暮らしを指導助言し、みなさんの悩みを学びの機会にしてきた石原繁野さんは、学びを重ねたいと考えます。毎月の食事会や夏のキャンプを利用して、あざみ棟の全員でさまざまな角度から老いと死について学びました。

その学びの一つとして、当時の奈良国立博物館資料室長をしていた西山厚さんの死に関する話が、西山さんの著書『仏教発見!』（講談社現代新書）で紹介されています。知的障害のある人たちに、死について話してほしいと依頼され、大変悩まれた西山さんは、お釈迦さまの話とハートの形の風船を使って、亡くなった人が生きている私たちの心のなかについて、私たちを見守っていること、自分が死んだ後には、また会えると話されました。死ぬのは怖くないというメッセージを込めて話されたそうです。



▲居室の棚に飾られた家族の写真と花



張 貞京

ちゃん ちよんきよん/京都
文教短期大学准教授。共著
に『保育者のためのコミュニ
ケーション・ワークブック』
(ナカニシヤ出版)。

齢になっていくみなさんにとって、身近な人の死は、やがて自分自身の死につながっていきます。今回は、死にかかわる学びと暮らしについて紹介します。

死にゆく学び

今から20年以上前ですが、もみじ・あざみの三つに分かれた生活棟（あざみ、もみじ・男子、もみじ・女子）のうち、あざみ棟はもみじ棟に比べて平均年齢が高く、身近な人や仲間の老いと死が課題となりつつありました。みなさんのなかには、久しぶりに帰省した実家で、認知症が進んだ母親から、「どちらさまですか?」と言われてショックを受けて戻った人がいたり、家族が亡くなる人も徐々に増え、いっしょに暮らす仲間までが病気で亡くなる経験をしていました。

身近な人の老いと死をどう受け止めればよいか、それぞれがとまどいや悲しみ、寂しさをしごと場や暮らしの場で友だ

話を聞いた数日後、あざみ棟の7人が、西山さんにお礼の手紙を送りました。7月号で紹介したマチコさんは参加者中の最高齢で、当時70歳代でした。マチコさんの手紙には、次のように書かれていたそうです。

「おしゃかさまは いつも かんがへて おられました。みんなが しあわせになれるように たのしく くらせるようにと。わたしが しんだら いちばん だいすきな おかあさんが きてくださいますね。しぬのは まだまだ こわいけど、おかあさんに あへるのが たのしみです」

自分の想いをあまり言葉にしないマチコさんは、身近な人の老いや死にとまどう友だちが話しているときも会話に参加していませんでしたが、死ぬのを怖いと感じていたことがわかります。そして、学びをとおして、死が怖くないと思えるようになったわけではないけれども、亡くなったお母さんに見守られていると考えるようになったことが表現されています。

学ぶ意味—「生き方」とこの社会科学習

あざみ棟でとりくまれた老いと死に関する学びは、それまでにおこなわれてきた学習会の流れのなかにあります。その一つが1980年代に始められた「社会科学習」です。10年間のとりくみをまとめた本のなかで、社会科学習に込めた石原さんの言葉を一部紹介します。

「みんなは町役場も県庁もどんな役割をもっているのか知らず、もちろん国会についてもわかりません。社会の仕組みからの学習が必要だと思いましたが、勉強ごっこであって